

RETAILER ACADEMY NEWS

Jan 2019 | Bentley Motors Japan

2018年の日本での新規登録台数は437台 コンチネンタルGT効果などで 史上2番目を記録



2018年(1～12月)に日本で販売されたベントレーは、前年比4.5%増の437台で、2006年の537台に次ぐ2番目の販売台数を記録しました。新型コンチネンタルGTやベンティガV8の日本でのデリバリーが始まったことに加え、リテーラーの皆様がベントレーの魅力を正しくお客様に伝えてくださったことで、良い結果を残すことができました。特に新型コンチネンタルGTの新規登録台数は174台を数え、全モデル中で最多を記録。ベンティガV8も56台と好調に滑り出しました。フライングスパーも根強い人気で、モデル別シェアでは18.5%にのぼる81台となっています。なお、日本自動車輸入組合(JAIA)がこのほど発表した2018年12月度の月報によると、輸入車(乗用車)全体では前年比2.8%増の34万2770台となりました。



今年は創業100周年という節目の年です。新型コンチネンタルGTコンバーチブルの日本導入も控えており、ベントレーへの注目度が例年以上に上がることが予想されます。リテーラーの皆様にも、さらなるご協力をお願いいたします。



■ 2018年(1～12月) ベントレーの新規登録台数

※()内はモデルごとのシェア(%)

コンチネンタルGT	W12 (634)	174 (39.8)
	V8/V8 S (624)	10 (2.2)
	W12 (624)	2 (0.4)
	コンバーチブル (625)	4 (0.9)
小計		190 (43.5)
ベンティガ	ベンティガ W12	89 (20.3)
	ベンティガ V8	56 (12.8)
	小計	145 (33.2)
フライングスパー	フライングスパー W12	24 (5.4)
	フライングスパー V8	57 (13.0)
	小計	81 (18.5)
ミュルザンヌ		16 (3.7)
その他		5 (1.1)
2018年合計		437

※出典：日本自動車輸入組合「輸入車統計情報2018年12月度月報」



美しさと速さを兼ね備えたラグジュアリーモデル BMW 8シリーズ クーペ/コンバーチブル

BMWジャパンは、2018年11月9日にBMW 8シリーズ クーペを発表。同日より発売を開始しました。実質的に現行6シリーズに代わる最上級のクーペモデルで、走行性能も第1級の実力を備えています。また、昨年11月には本国で新型BMW 8シリーズ コンバーチブルを発表。同月に開催されたロサンゼルス・モーターショーでワールドプレミアを果たしています。

美しさにこだわったエクステリア



8シリーズ クーペのエクステリアデザインは、優雅なラインと低く伸びやかなシルエットにより、最上級クーペにふさわしい美しさとスポーティさを兼ね備えています。



フロント周りでは、低めに配置されたキドニーグリルと各部のシャープな造形により、高級感と存在感の高さを両立。ボディサイドでは、低いレーフラインと流れるようなボディライン、さらに力感のあるリアフェンダーにより、エレガントさとダイナミックな走りのイメージを融合させています。



リア周りでは、水平基調のラインとLED テールライト、そして全幅1,900mmの車幅により、ワイド＆ローのシルエットを形成。走行性能の高さをイメージさせます。

機能性と高級感を両立したインテリア

インテリアでは、ドライバー側に向けられたセンターコンソールが、ダッシュボードから連続的なカーブを描いて配置される特徴的なデザインを採用。操作系は機能別に整理され、ドライビングに集中でき

る環境が整えられています。また、セレクトレバーは透明度の高いクリスタルで形成。その中に数字の「8」が浮かび上がる凝ったディテールに、質感の高さが感じられます。



ダッシュボード中央に配置される10.25インチのコントロールディスプレイと、12.3インチのフルデジタルメーターパネルは、どちらも表示内容をカスタマイズすることができます。コントロールディスプレイの操作は、タッチパネル、センターコンソールのコントローラー、ステアリングスイッチに加え、音声コントロールとジェスチャーコントロールによる操作も可能。多彩なインターフェイスを特徴としています。

スポーツカーに匹敵する動力性能を実現

エンジンは、新開発となる4.4 リッターV型8気筒ガソリンエンジンを搭載。先代のエンジンにさまざまな改良を施したことで、68 psのパワーアップを実現。最高出力530 ps、最大トルク750 Nmを発揮します。

前後輪の駆動トルクを無段階に可変配分する4輪駆動システムのBMW iDriveに加え、リアアクスルには電子制御式ディファレンシャルロックを装備。サスペンションでは従来のアクティブサスペンションシステムに電子制御アクティブスタビライザーを新たに備えています。これにより、スポーツカーらしいドライブフィーリングとコーナリング時の安定性、そしてダイナミックな加速を実現しています。



ボディは、内部構造部材にカーボン、ボディパネルにアルミなどの軽量素材を効果的に使用することで、高剛性と軽量化を両立しています。4.4L V8エンジンを搭載するラグジュアリークーペでありながら、車両重量はわずか1,990kg。0-100km/h加速3.7秒という数値はポルシェ 911 カレラ GTSと同一で、名実ともにスポーツカーと同等のパフォーマンスを備えています。

本国ではコンバーチブルも発表

BMW 8シリーズの2番目のモデルとして、2018年11月に本国で発表されたのが8シリーズ コンバーチブルです。オープントップの素材はクラシカルなソフトトップで、電動式ソフトトップの開閉時間は約15秒。走行中も50km/h以下であれば開閉可能で、走行風の巻き込みを抑えるウィンドディフレクターが装備されます。オープン化に伴い、車体各部とフロントスクリーンフレームが強化され、リアシート後方には緊急時にポップアップするロールオーバーバーが装備されるなど、万全の乗員安全対策が施されています。



モデルバリエーションは、日本仕様の8シリーズ クーペと同じ、最高出力530 psの4.4L V8ツインターボガソリンエンジンを搭載するM850i xDrive コンバーチブルと、最高出力320 ps、最大トルク680 Nmを発揮する3L 直6ディーゼルトーボを搭載したBMW 840d xDrive コンバーチブルの2種類を設定。欧州での発売は2019年3月を予定しています。日本には2019年中にBMW M850i xDrive コンバーチブルが導入されると思われます。



BMWの新たなラグジュアリーモデルとして登場したBMW 8シリーズ。今後も3番目のモデルとして4ドアクーペのグランクーペが予定されており、モデルバリエーションはさらに拡大する見込みです。

価格：BMW M850i xDrive 17,140,000円



COMPETITORS INFORMATION

アメリカと日本の新作が主役となった デトロイト・モーターショー 2019

2019年1月19日から27日の日程で一般公開が行われる「デトロイト・モーターショー 2019」。今回の目玉はトヨタが以前から開発を進めていた新型スーブラの発表でした。ラグジュアリーブランドでは、レクサスとキャデラックが新型車を発表した一方、欧州車ではフォルクスワーゲンと、FCAグループのフィアットおよびアルファロメオしか出展しないという状況。日本車もトヨタ、日産、ホンダ、スバルのみの出展に止まりました。

一方、ラスベガスで行われた世界最大級のエレクトロニックショーである「CES 2019」には、ダイムラー、BMW、アウディなどのドイツ勢が出展。自動運転技術や新型車のプレゼンテーションを行うなど、国際モーターショーの転機を感じさせるものとなりました。

TOYOTA GR SUPRA

トヨタ GR スーブラ



17年ぶりの復活となる新型スーブラは、TOYOTA GAZOO Racingの「GR」シリーズ初のグローバルモデルとして登場。直列6気筒エンジンを搭載するFR車という伝統的なレイアウトを踏襲しています。エンジンやプラットフォームはBMW Z4と共通で、両者の走りの違いが気になるところです。

Cadillac XT6

キャデラック XT6



キャデラックは、現行モデルのSUV「XT5」の上に位置する最上級モデル「XT6」を発表しました。3列シートを備えたSUVで、エンジンは3.6LのV6エンジンを搭載。同社の最新コネクティビリティも装備されます。内外装は、「プレミアムラグジュアリー」と「スポーツ」の2種類から選択可能です。

LEXUS LC Convertible concept

レクサス LC コンバーチブル コンセプト



フラッグシップクーペである「LC」をオープンモデルに仕立てたコンセプトモデル。コンバーチブル化に伴うデザイン的な破綻は一切なく、専用の22インチホイールの装着も相まって、より洗練されたエクステリアへ昇華しています。そのまま市販されても違和感のない完成度の高さが特徴的です。

Cadillac EV

キャデラック EV



キャデラックは、GMのEVプラットフォームを使った最初のモデルが、同社のフルEVとなることを発表しました。このプラットフォームには柔軟性があり、さまざまな駆動方式に対応。より短い開発期間で顧客の好みに応じたモデルを提供できるとしています。正式なモデル名は後に発表される予定です。

LEXUS RC F

レクサス RC F



レクサスは、マイナーチェンジした新型「RC F」を発表しました。従来型比20kgの軽量化、新開発タイヤの採用、ディファレンシャルのローギアード化などで走行性能を向上。高性能版の“Performance package”では、CFRP製パーツの採用などにより、従来型比70kgの軽量化を実現しています。

Mercedes-Benz CLA Coupé

メルセデス・ベンツ CLA クーペ



デトロイト・モーターショーではなく、CES 2019に出展したダイムラーは、その会場で新型CLA クーペを発表しました。新型Aクラスの兄弟車となるこの4ドアクーペモデルには、新たにジェスチャーコントロール機能を備えたインフォテインメントシステムの「MBUX」を搭載。日本導入時期は未定です。

EXHIBITION

オートサロン2019 ダンロップブースに新旧ベントレー

去る1月11日～13日に千葉・幕張メッセで開催された東京オートサロン2019のダンロップブースに、ミュルザンヌ Speedと3リッターを展示しました。3リッターは、ベントレー モーターズが初めて販売したモデルで、1920年代の黄金期を築いた象徴的存在でもあります。

ダンロップの創業者は、アイルランドで獣医として裕福な生活を送っていたJ.B.ダンロップ。ダンロップは1888年、10歳の息子ジョニー



1924年のル・マンで優勝した3リッター。ダンロップ製タイヤを装着していた。

から「僕の自転車をもっと楽に、もっと速く走れるようにして」という要望を受け、ゴムチューブとゴムを塗布したキャンバスで空気入りタイヤを製作しました。同年に空気入りタイヤに関する特許を取得したことから、ダンロップのタイヤメーカーとしての歴史が始まったのです。奇しくもW.O.ベントレーが誕生したのもこの年でした。

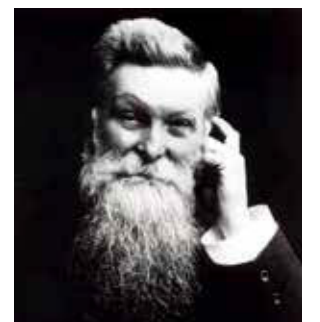
その後、自転車用タイヤで名を上げていったダンロップですが、20世紀に入ると、自動車用タイヤの分野にも進出。日本に上陸したのも1909年で、当初は自転車用タイヤと人力車用のタイヤを製造していました。

タイヤの技術が開いた1920年代は、1924年にレーシングドライバーのP・デュトワがワイヤードタイプのタイヤをテストするなど、ダンロップがモータースポーツに積極的に関わり始めた時期でもあります。ベントレーの3リッターが制した1924年のル・マンは、ダンロップにとってル・マン初優勝という記念すべきレースでした。なお、



1931年までル・マンを制したマシンは、すべてダンロップ製タイヤを装着していました。

同じ英国発のブランドで、なおかつ同時期に黄金時代を築いた長年のパートナーシップから、ベントレーの創業100周年にあたる今年のオートサロンでコラボレーションが実現しました。展示した3リッターもミュルザンヌ Speedも、ともにダンロップ製タイヤを装着しています。



ダンロップ創業者のJ.B.ダンロップ。もとは獣医だった。



ベンティガにマリナー特別仕様車登場 日本のみ10台限定で2月発売

ベントレー モーターズ ジャパンは、ベンティガ W12 (19MY) をベースにしたマリナーの特別仕様車「ベンティガ リミテッド エディション by マリナー エクスクルーシブ for ジャパン」を発売します。日本限定発売の特別仕様車は、2017年2月に発売したコンチネンタルGT V8 S ムーンクラウド エディション以来。マリナー エクスクルーシブ for ジャパンは、内外装に特別な仕様を取り入れたベンティガで、日本市場のみに10台限

定で販売されます。発売予定は2019年2月で、車両本体価格は30,860,000円(税込)。ベースモデルから3,000,000円のアップで、特別仕様に加えて各種メーカーオプションが含まれている点を、ぜひお客様にアピールしてください。

ベンティガ マリナー エクスクルーシブ for ジャパンの特徴

EXTERIOR

ボディカラー：ポーセリンのみ（シルバーに似たメタリック）

ホイール：22インチパラゴンホイール（セルフレベリングパッド付）

Mulliner LEDウェルカムランプ

ユニオンジャックフラッグ



INTERIOR

レザーカラー：メインハイド＝リネン、セカンダリーハイド＝インペリアルブルー

アクセントカラー：キャメル

コントラストステッチ：キャメル

ウッドパネル：ブラックダイドマドローナ

フェイスアパネルに寄木細工をモチーフにしたウッドストライプ

トレッドプレート：「MULLINER」刻印



■ 注意点

ブラックダイドマドローナは、光の当たり方によってはピアノブラックとの違いが明確に判別できません。ピアノブラックは光沢のある仕上がり特徴です。一方、ブラックダイドマドローナは、光沢を抑えた仕上がり感と、下地にウッドの年輪模様がうっすら見えるのが特徴です。

標準装備される メーカーオプション

- ツートンステアリングヒーター
- フロントシートコンフォートスペック
- ディープパイルオーバーマット（リネンカラーのコントラストバインディング含む）
- コントラストステッチ（ステアリングのコントラストステッチ含む）
- ウッドセンターパネル
- ツーリングスペック
- ムードライティング
- サンシャインスペック
- バッテリーチャージャー

MATERIALS

コンバーチブルのルーフに初採用の ツイードとはどんな素材？



新型コンチネンタルGTコンバーチブルのルーフは、7種類のカラーをご用意しています。その中でも有償オプションには、ベントレー初採用のツイードが加わりました。今回は、「ツイード」についてあらためて解説します。

ツイードとは、英国・スコットランドの毛織物の一種です。本来はスコットランド産の羊毛を手で紡いでできた太い糸を手織りで平織りが綾織りで仕上げた生地でした。織る前に糸をさまざまな色に染め、色彩による細かい模様を入れるのもツイード生地の特徴の1つです。暖かく防寒性が高いため、冬のコートやジャケットの素材として人気があります。いわゆる英国の伝統的な織物と言って間違いありません。基本的には毛織物ですが、近年では毛以外の天然繊維や化学繊維が使用されることも多くなっています。

ツイード生地のブランドとして日本でもよく知られているのが「ハリスツイード」です。この高品質のツイードブランド発祥の地は、スコットランドのアウトターヘブリディーズ諸島。大きな特徴は、ヴァージンウールの使用、島内での染色&紡績、職人による手織り（人力織機）です。そして、ハリスツイード協会によって定められた厳しい基準をクリアした生地だけが「ハリスツイード」として認められます。日本でも見る機会が増えたハリスツイードのラベルは、厳しい審査を経た生地である証なのです。

コンチネンタルGTコンバーチブルのルーフには、この英国伝統の生地を現代的な解釈を与えて用いています。世界で最もラグジュアリーなオープントップのグランドツアラーにふさわしい素材と言えるでしょう。

OPTIONAL FEATURE

コンチネンタルGTの ブラックラインスペック



昨年11月下旬から、コンチネンタルGT用のブラックラインスペックが注文可能となっています。コンフィギュレーターでも選択可能です。押し出しが強く謎めいた外観を提供するブラックラインスペックは、標準仕様のエクステリアのクロームパーツ（ウイングド‘B’バッジとリアのBENTLEYレタリングを除く）がブラックペイント仕上げに変わります。コンチネンタルGTに装着すると、このモデルが持っている美しさが、力強く完璧なまでに魅力的なものに変わります。

リテーラーの皆様には、コンチネンタルGTに個性を加えたいと希望するお客様に対し、ブラックラインスペックをお勧めしてください。コンフィギュレーターでも、このオプションを装着した状態を再現できます。商談中にぜひご活用ください。

ブラックラインスペックでブラック仕上げになるパーツ

- | | |
|----------------------------|--------------|
| • マトリックスグリルおよびフレーム | • ドアハンドル |
| • ウイングベントおよび下部サイドシル | • サイドウインドウ周囲 |
| • リアバンパーストライクおよびナンバープレート周囲 | • テールパイプ |
| • ヘッドランプ周囲およびテールランプ周囲 | |

CULTURE

ベンティガの日本限定車 特別仕様のモチーフとは？

P4で詳細をご紹介したベンティガ リミテッドエディション by マリナー エクスクルーシブ for ジャパンですが、内外装ともに特別仕様が施されています。ここでは、外装の特別仕様の1つ「ユニオンフラッグ」と、内装の特別仕様の1つ「ウッドストライプ」について、モチーフとなったデザインについて解説します。

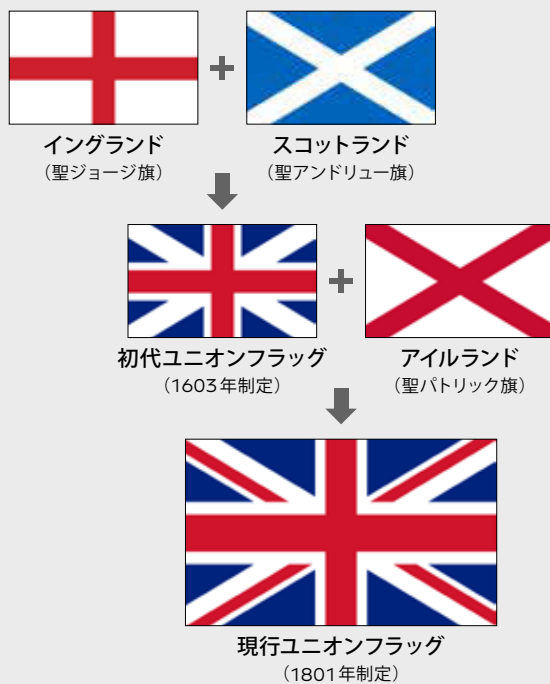
ユニオンジャック



ユニオンジャックは英国、つまりグレートブリテン及び北アイルランド連合王国の国旗として知られています。ユニオンフラッグとも呼ばれる王室旗です。この旗のデザインには、英国の成り立ちを示す歴史が込められています。初代ユニオンフラッグは、1603年のイングランドとスコットランドの「同君連合」のときに制定されました。1707

年に両国はグレートブリテン王国となり、1801年にアイルランドと合同。この際にアイルランド国旗を組み合わせ、現在のユニオンフラッグになったのです。

■ ユニオンジャックの図説



寄木細工



寄木細工は江戸時代から続く伝統工芸で、さまざまな種類の木材を組み合わせ、それぞれの材色や木目を生かして精緻な幾何学文様を描く木工技術です。特に神奈川県・箱根の寄木細工が全国的に知られており、200年ほどの歴史があるとされています。箱根寄木細工は、木材を組み合わせた「種板」を薄く削って小物に貼り付けたり、種板をそのまま加工して製品にしたりします。盆や茶托、仕掛け箱が有名ですが、現代のライフスタイルに合わせた製品も増えてきました。ちなみに、箱根駅伝の往路優勝チームには、1997年から箱根寄木細工のトロフィーが贈られています。



ソフトトップとメタルトップ

ついに日本でもコンチネンタルGTコンバーチブルの導入が発表されました。
そこで、今回はルーフにファブリックを使うソフトトップと金属のメタルトップとでは、どのように異なるのかを紹介します。



エレガントで独自のフォルムを生み出すソフトトップ

世の中には、数多くのコンバーチブルが販売されており、そのルーフにはファブリックのソフトトップと、金属のメタルトップが存在します。コンチネンタルGTが採用するルーフはソフトトップとなっています。メタルトップと比べると、ソフトトップは古い歴史を誇ります。もともとクルマの始祖となるのは馬車であり、馬車には日よけとして骨組みに布を張った幌が利用されていました。そういう意味では、布を使ったソフトトップは、よりトラディショナルな存在と言えるでしょう。また、世に多くあるコンバーチブルは、ベースモデルにセダンやクーペが存在することが多くあります。そうしたとき、多くのコンバーチブルは、セダンやクーペと異なるフォルムをソフトトップで作り出しています。また、ソフトトップはメタルトップと比べて、よりコンパクトに収納できるという特徴もあります。さらにソフトトップの作りは年々進化しており、メタルトップに近い耐候性や遮音性能を備えるようになっていきます。

コンチネンタルGTのクーペとコンバーチブル



ファストバック的なルーフを備えているコンチネンタルGT。



幌をトランク部に収納するためにセダンのようなフォルムとなる。

メルセデス・ベンツSクラスのクーペとカブリオレ



Sクラスクーペのルーフは流れるようなラインを描いている。



Sクラスカブリオレもセダンのようなフォルムが特徴だ。

■ ルーフ素材によるメリットとデメリット

	メタルトップ	ソフトトップ
メリット	<ul style="list-style-type: none"> 耐久性に優れる 静粛性に優れる 熱や寒さの遮断性能が高い 	<ul style="list-style-type: none"> 軽量で収納時にコンパクトになる 大きなルーフにも使用できる 独自のフォルムを形作れる
デメリット	<ul style="list-style-type: none"> 構造が大きく重くなる 収納時に大きなスペースが必要 あまり大きなルーフには向かない 	<ul style="list-style-type: none"> 音や熱の遮断性能が金属より劣る 紫外線などによる劣化が金属に劣る 刃物に対して弱い

クーペとオープンカーを両立させるメタルトップ

メタルトップを備える車両の特徴は、オープンカーとクーペを1台で両立させるところでしょう。ルーフを開ければオープンカーであり、閉じればクーペとなります。ソフトトップの場合は、クーペとコンバーチブルの両方が存在するケースが多いのに対して、メタルトップ車両は、他にクーペが存在しないということが大多数です。つまり、コンバーチブルでありながらクーペの役割も1台でこなしているということです。メタルトップは、当然のことですが、ソフトトップよりも素材が硬いため、耐候性や遮音性能に優れます。しっかりと閉じていれば、文字通りにクーペと同様の快適性を得られます。ただし、ルーフの重量がかさむため、機構が大きく重くなり、大きな収納スペースが必要となります。そのためオープン時には、トランクの容量が大きく削られることもあるのです。また、4座のように前後に長いルーフは、特に重量がかさむためメタルトップには向きません。

メルセデス・ベンツ SL



メタルトップ（バリオルーフ）を採用するSLクラス。

フェラーリ ポルティフィーノ



カリフォルニアの後継のポルティフィーノもメタルトップだ。

新型モデルの多くはソフトトップを採用

コンバーチブルのルーフにはソフトトップとメタルトップがありますが、最近の新型車の多くはソフトトップを採用する傾向が強いように見えます。ポルシェは昔からソフトトップを採用していますし、アウディのR 8もソフトトップです。また、AMG GTのロードスターもソフトトップ。さらにBMWは、新型のZ4と8シリーズ、カブリオレにもソフトトップを採用しています。エレガントで収納時にコンパクトにできるだけでなく、ソフトトップの静粛性などの性能アップがそうした傾向の理由に違いありません。



メタルトップは収納にかさばり、写真のようにトランク容量を大きく減らすこともある。



最新的话题モデルであるBMW 8シリーズ・カブリオレもソフトトップを採用している。